

「4Hでハッピーに」

登米市4Hクラブ

全国農村教育青年会議意見発表の部
東北地区代表 阿部善光



登米市4Hクラブでは、共に活動したい農業青年を募集中。詳しくは、担当阿部まで(電話番号:090(7937)5627)

後列左から4番目が阿部善光さん、同5番目が高崎大喜会長

第48回東北農村青年会議岩手大手県花巻市で開かれた。大会は、東北6県の農業青年を対象に、日頃の農業経営、農村生活で得た知識や技術、プロジェクト活動の成果を、相互に交換することを目的に毎年開催。

この席上で、本県代表として登米市4Hクラブの阿部善光さん、南方町板倉さんが「挑戦〜I'm Ready! Do my Best!〜」と題し、意見発表。審査の結果、最優秀賞に選ばれ、3月に東京で開催される「全国農村教育青年会議」に東北地区代表として推薦された。意見発表の部での全国推薦は登米市初。阿部さんは「全国の舞台上に立てるのは光栄なこと。4Hクラブ

の先輩や仲間たちに、協力や刺激をもらえたから全国に行ける」と、支えてくれた人たちに感謝する。

阿部さんは、1年7カ月間、米国カリフォルニアの農業法人でイチゴ作りを学んだ。そこは、600人以上の従業員を雇用するなど、日本では考えられないレベルの大規模農業を展開。従業員は、米国人だけではなく、メキシコ人や中国人など多くの人が集まり、英語やスペイン語など多くの言語が飛び交っていた。「施設はオートメーション化、作業はマニュアル化され、農業というより工場で作業していた感じだった」。

大規模農業に身を置いているうちに、気付いたことがあった。

日本には四季があり、寒いときは寒いなりに、暑いときは暑いなりに対応し、作物を栽培している。「米国の大規模農業はマニュアル頼み。マニュアルにない状況が発生すると、従業員は対応できない。日本の農家は、細かい状況変化に対応でき、栽培技術は非常に高い」。外から日本を見ることが、その強みに気付いた。

収穫量では欧米にかなわないが、味や衛生面での安全性など、品質の高さは世界トップクラス。「欧米を見てがっかりするのはなく、良さと強みを追求していけば、世界が相手でも勝負できる」「日本人は人との和を大切に。個人で勝負するのはなく、和をもって農家が輪になり、オールジャパンで農業をレベルアップさせる」という答えに行き着いた。これをまとめたのが「挑戦〜I'm Ready! Do my Best!〜」だ。

4 Hクラブは農業青年クラブとも呼ばれている。日本農業を支える20〜30代の若い農業者を中心に組織。全国で約850クラブ、約1万3千人が加入している。農業経営課題の解決方法を検討したり、より良い技術を検討したりするためのプロジェクト活動を中心に、消費者などとの交流、地域ボランティア活動を展開している。

4 Hとは「農業改良と生活改善に役立つ腕(Hands)を磨き、科学的に物を考えられる頭(Head)の訓練をし、誠実で友情に富む心(Heart)を培い、楽しく暮らし、元気で働くための健康(Health)を増進する」という、4つの信条の頭文字を取った総称。

登米市4Hクラブは、28人の会員で構成。しかし、3年前までは現在の半分ほどだった。「登米市農業発展には、若手農業者のつながりが必要」と、高崎大喜会長、米山町場の筆頭に、農業生産法人社員や新規就農者などに声を掛け、現在に至った。高崎会長は「人数が多いと意見も増え、活動の幅も広がる」とにっこり。

活動は、毎月定例会を開き、農事情勢や経営の意見を交換。「クラブ員は、野菜、花卉や畜産などいろんな分野に取り組んでいる。それぞれの取り組みの中に、経営のヒントが隠れている」と、自らの経営や農業発展を模索する。また、イベントなども手掛け、本年度は南方町の桜祭りとコラボレートした。

食育にも力を注ぐ。7年前から、東和町の耕作放棄地でソバを作付け。収穫後は、登米幼稚園の園児たちとそばを打ち、収穫祭を開いている。クラブ員は「先輩から引き継いだ大事な事業。幼いときの体験は忘れない。農業が食をつなげ、食が人をつなげる。園児たちが大人になったとき、農業をつないでもらえれば」と、未来の農家の種をまいている。

クラブ員たちは笑顔で語る。「登米市は農業のまち。農業が元気になれば、まちも活気づく。4つのHで登米市をハッピーにしたい」。